様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 １３ 日現在

機関番号：１４６０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５３７０３５８

研究課題名（和文）老いる女性たち（へ）の視線：フランス女性作家とその作品を通じて

研究課題名（英文）Aged Women Characters in Modern and Contemporary French literature

研究代表者
高岡　尚子（Takaoka, Naoko）

奈良女子大学・人文科学系・教授

研究者番号：３０４０３３１４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究課題は、フランスの近現代小説に描かれた「老いる女性」へのまなざしを分析し、その特徴と、そこに現れるジェンダー構造を明らかにすることであった。19世紀に書かれた男性作家による小説からは、「老いる女性」に対する強い嫌悪と同時に恐怖が存在することが読み取れた。また、女性自身が書いた作品にも、自らが老いることも含め、軽蔑的な視線が存在することは確かだが、一方で、特に、自身の母親の死を描いた女性作家たちの言説には、女が生きることへの敬意と、母の尊厳を取り戻そうとする意図が見られた。ここに、「老いる」ことの考察をきっかけとして結び直された、女性たちの世代を超えた絆の存在を指摘できる。

研究成果の概要（英文）：The purpose of my research was to reveal the mechanism of the strict rules of "gender" structure, analyzing the judgments by men on the "Aged women" in literature. First, I have observed the strong hate and horror for old women in novels written by male writers. Certainly, almost identical ways were shared by women writers, but I saw that some writers, like George Sand, Marguerite Yourcenar, Simone de Beauvoir, Annie Ernaux, etc., had shown a clear intention to save the women's dignity, by describing their own dying mother. I note that these writers have provided evidence of the possibility of strong and friendly relationship between two generations of women.

研究分野：フランス文学

キーワード：仏文学　文学一般　ジェンダー　女性学

１．研究開始当初の背景

「老い」は古くから文学作品に頻出するモチーフであり、重大な関心事のひとつであった。文学作品に登場する「老人」たちは数限りなく、老いる自らの精神や肉体を冷徹に観察し、書き記すことに力を尽くした作家も多い。だが、フランスにおいては、19 世紀に入り、女性が量的にも質的にも本格的に文学界に参入する体制が整うまでは、ほぼ男性作家による、男性の立場に関する言説が中心であった。長生きする女性たちの中から、自らの「老い」に向き合い、書きとめ、出版するような「書き手」が出現したのはごくごく最近のことである。

「老いと文学」を結びつけて考え、研究の対象とすることもまた、ここ最近始まったばかりの取り組みである。特に、高齢化が著しい日本やフランスにあっては、「老後」の問題には常に、経済・政治・福祉・国際問題といったあらゆる側面からのアプローチが求められる。そうした中では「文学」もまた例外ではありえないし、「文学」の領域であるからこそ表現しえる「老い」や「老後」の可能性について、検討する余地は多いにある。「女性の老い」を文学に問いかける背景には、このような事情があった。

２．研究の目的

19 世紀フランス小説をジェンダー視点から検討すると、女性の人生に期待される役割が厳格に固定化されていることが明らかになる。特に「セクシュアリティ」と「子供」に注目した場合、結婚前の娘には「処女」であることが求められ、結婚した後は「家庭の中の天使」である「妻」や「母」としてふるまうことが求められる。一方で、この役割とライフコースを踏み外した女性たちは、「娼婦」や「悪女」のレッテルを貼られ、物理的にせよ心理的にせよ、社会の外側へと追いやられることになる。

この役割期待とライフコース設定の厳格さについて、さらに検討を深めれば、「家庭の中の天使」である母・妻役をこなしながら年をとり、生き続ける女性の「老後」という問題に直面せざるをえない。「母」や「妻」の役割を終えた女性にとって、その後の人生はどうなるのか。何の／誰のために生きるのかといった問いかけにぶち当たることになるのだ。

19 世紀から 20 世紀のフランスには、サンドをはじめ、コレット、ボーヴォワール、ユルスナールなど、老年を迎えてなお健筆をふるった女性作家が多くいる。彼女たちが書き残した、「女性が老いること」への証言に耳を傾け、私たちが否応なく直面する「老い」へのまなざしを鍛えることが、本研究の目的であった。

３．研究の方法

本研究は、次の三方向からのアプローチによって成果を得た。

(1)女性が老いることに対し、男性作家がどのようなまなざしを向けてきたかについて、おもに、19～20 世紀のフランス小説を中心に検討した。

(2)19 世紀から 20 世紀にかけてのフランス女性作家たちが、作中人物にどのように「老い」を語らせているかを検討した。

(3)19 世紀から 20 世紀、さらには現代のフランス女性作家たちが、自らの「老い」や母親の老いと死について、どのように語っているかを検討した。その際、フランス以外の国で活躍する現役作家も視野に入れ、比較の対象とした。また、他の分野の文学研究者らと「女性と老い」をテーマに対話や討論をする場を設定した。

４．研究成果

研究成果は報告書（『老いる女性たち（へ）の視線：フランス女性作家とその作品を通じて』）に詳述している。奈良女子大学学術情報リポジトリにて、近日公開の予定である。以下は、その概要である。

(1)女性が老いることへのまなざし

「女性性」と「老い」は、どのように関係づけられてきたのか。この問題を検討するには、「老いた女性」（＝「老女」）が、男性作家によってどのように描かれてきたかを分析する必要がある。一方で、「老いた男性」（＝「老人」）の描き方と差があるのか、という視点を持つ必要もある。その結果、「老女」にはほぼ一定して軽蔑的な視線が向けられ、多くの場合は嫌悪や恐怖、憎しみの対象になる反面、「老人」については、そうした側面はありながら、一方で、「知恵者」あるいは「年の功」を重ねた人物として尊敬される場合もあることが確認された。ここに、ジェンダーの不均衡を指摘することができる。

(2)女性作家が感じる「老い」のあり方

一方、女性作家たちが考え、意識する「老い」にはどのような特徴が認められるのか。主に 19 世紀フランスの女性作家、ジョルジュ・サンドとその作品を題材に、その特徴を探った。

まず指摘しておく必要があるのは、サンドの作品に登場する女性たちの中には、非常に若年の頃から「老いた」と表現する者が散見されるという点であり、それは、当時の社会的風潮である「世紀病」の影響と男性からの評価によるところが大きい。

ところが、初期の作品に見られたこのような表現は、中期の小説『イジドラ』には登場しない。主人公イジドラは、鏡に映った老いゆく自分の姿をありのままにとらえ、若い頃、男性の視線に翻弄され、それによって失って

いた自己肯定感を回復することになる。
　サンドの晩年のコント集『祖母の物語』や自伝的作品『印象と思い出』などにおいて、老いはむしろ再生の源と考えられているのと同時に、「死」の概念も解釈がし直されていることが解明された。特に『祖母の物語』に収められたコント数編に特徴的な「輪廻」を思わせる思考は、サンド晩年の作風と思想とをよく表している。さらに、祖母の世代から、孫娘の世代へという、女同士のつながりも明らかにすることができた。

(3)女性作家たちが描いた母親の死
　女性作家たちが、自分の老いと死の予行演習とでもたとえるべき、自身の母親の死をどのように観察したかについて、幅広く検討した。
　まず、「作中人物」の延長として創出された作家たちの母親に注目し、彼女たちが母の死をどのように描いたか、という新しい視点を開拓した。このことにより、作家自身の「老い」への意識をさらに鮮明にとらえることができるようになり、同時に、女から女へという世代間の受け渡しという問題項にも光を当てることができるようになった。ジョルジュ・サンド『我が生涯の記』(19 世紀）をはじめ、シモーヌ・ド・ボーヴォワール（『おだやかな死』）やマルグリット・ユルスナールの『追憶のしおり』(20 世紀)、さらには、アニー・エルノー（『ある女』）やノエル・シャトレの『最期の教え』(21 世紀）まで、母親の死の前後を作品として書きとめた女性作家は多い。
　なぜ彼女らは、自身の母の死という身近ではあるが、およそ、外に出して示したいと思えないような事柄を、あえて書きとめ、発表しようとするのか。そこには、女性が自分を産んだ女性の最期と向き合い、エクリチュール（書くという行為）に落とし込むことによって、今度は作家自身が母親を産みだす存在になろうとする意図を見出すことができた。

(4)「老いる」女性を書き続けること
　最後に、近代社会システムにおける「老い」とジェンダーの関係を整理し、そこから導き出すことのできる「女」と「性」・「老」・「死」の様相を明らかにした。その際、「老妓」をテーマとした小説である、岡本かの子『老妓抄』(1938 年)、林芙美子『晩菊』(1948 年)、およびコレットの『シェリの最後』(1926 年)を分析しながら、自らの身体を手段に、主体として生きることが可能であった女性たちの老いについて検討した。
　しかし、彼女らはあくまでも、求められる女性のライフコースからは逸脱した存在であり、一般の女性たちの姿は、まだまだ「書かれない」存在として残っている。その意味で、老女たちの現状は、まだ、正しく把握され、感じ取られているとは言えないのかもしれない。だが、多くの女性作家たちが、自分の母親の老い、死にゆく姿を含めて、老いをそれ自体として描くようになってきているのも事実である。そこに見出されるものは、不協和音であっても、喜びもであっても、看過されるべきではないだろう。ジェンダーの非対称と共に、世代の非対称性もまた、構造から解き放たれるときを必要としているのであるから。

(5)「女」「研究」をつなぐことの意義
　本研究課題の目標として、分野を横断するテーマの共有と、国際学会への参加を含む研究者の交流を設定した。国際学会での発表のほか、本課題を出発点として、他大学の研究者を交え、奈良女子大学文学部「ジェンダー言語文化学プロジェクト」第一回研究会を開催するなどの成果を得た。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 3 件）

①高岡 尚子「母の死を描く女性作家たち」、『欧米言語文化研究』、査読無、第 3 号、2015 年、123 - 141
http://nwudir.lib.nara-wu.ac.jp/dspace/handle/10935/3703

②高岡 尚子「老いゆく女の尊厳―母を看取る娘（作家）たちのことば」、『欧米言語文化研究』、査読無、第 2 号、2014 年、92 - 112
http://nwudir.lib.nara-wu.ac.jp/dspace/handle/10935/3928

③高岡 尚子「『老い』はどう語られるか―ジョルジュ・サンド晩年の作品を通じて」、『欧米言語文化研究』、査読無、第 1 号、2013 年、109 - 127

〔学会発表〕（計 2 件）
①高岡 尚子《 Solange Clesinger-Sand : ecrivaine ou fille d’ecrivaine ? 》、第 20 回国際ジョルジュ・サンド学会（ヴェローナ大学／イタリア、2015 年 6 月 30 日）

②高岡 尚子 《 Comment vieillir ? : la vieillesse ideale ou l’ideal de George Sand vieillie 》、第 19 回国際ジョルジュ・サンド学会（ルーヴァン・カトリック大学／ベルギー、2013 年 6 月 21 日）

〔図書〕（計 0 件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計 0 件）

名称：

発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
高岡　尚子（Takaoka，Naoko）
奈良女子大学・人文科学系・教授
研究者番号：30403314